

小品四篇

その月その日

五月十三日

岡田美知代

同じ同志社教會に籍を列ねたる我が小さき名覺へ給ふや否や、御名は折々に聞き參らせ候、殊に文字の上に御心注がせ給

ふとか、嗜好を等しうする人を我姉妹の中に得て、崇高なる天の文字を鼓吹せば如何に悦ばしう候やらん、願はくは冥想到に耽り給ふての美はしき御歌もらさせ給へ、京は青葉の都と相成り申して、加茂はたゞすの森の邊り子規も來鳴き候、と華奢に認めて、くつきりと一輪涼しい白百合のお繪葉書でございました。

以前彼方に居ました頃は、一校の秀才として譽高い信夫様友達のお噂すに別に教へられるとも無うそれと知つて、教會の集會に陰ながらの御目もじも二年越し、其後學科の都合で東京に轉じましたが、諸文學雜誌に御名見出す度毎、云ひ知らぬ懷しさに殊更幾度となう繰返へし、果ては帽子眉深にステッキを斯う、始終何かしら考へて、人は人俺は俺と云つたやうな御様子にお歩さなすつた、其様なお癖迄思ひ出して、今頃はお好きなりしたゞすの森に……と夕暮を偲んでも見ました。あゝ其信夫様から思ひもかけぬ御便り、ときめく胸にかき擁き、何故とは知らず、そつと庭に下り立つて青葉かげを逍遙ひ乍ら、改めて今一度讀み下してじつと見入つた儘、さて御返事はどの繪葉書にいたしましたよう。

六月九日

まあ驚いたこと！信夫様は何故文科を遊ばさないのだらう、神學部とは思ひもかけなかつたわ、けども昔から熱心な信者で、彼の御信仰で被居つては、一生を神のため聖事業に献げやうと遊ばすに無理もない、が返へすく、あれ丈けの文才をお持ちなすつて、それで……と思ふと残念です、残念です、妾の本當の兄様ならば、無理にもおとめ申すのだけれ

ど、幾らお親しくして頂けばとて、人様の事を御指圖がましい……母様に話せば、

『御結構じやないか』

つて澄まして被居るんだもの。

けれども嬉しい、夏期學校のお話したらは、母様も御賛成で、久方振りに神戸の伯母様にお目もじかた、父様に願つて是非つれて行くとの御許し、場所が原田の關西學院でなかつたら、つい神戸から通ふわけにも行かず、斯うたやすくは許して被下らなかつたでせう、兎に角、兎に角、早く七月が來れが好い。

信夫様は幹事で被居ると云へば、何彼と準備においそがしいとでせう。

七月二十五日

夕暮信夫様と二人摩耶の麓に行き、くれゆく日影の榮うすい西の海を眺めて、浸々と語り、思はずも涙にむせぶ。

あゝ何と云ふ悲しい……彼の美しい白百合の繪葉書一葉、それが妾の運命を支配しやうとは夢にも知りませんでした。